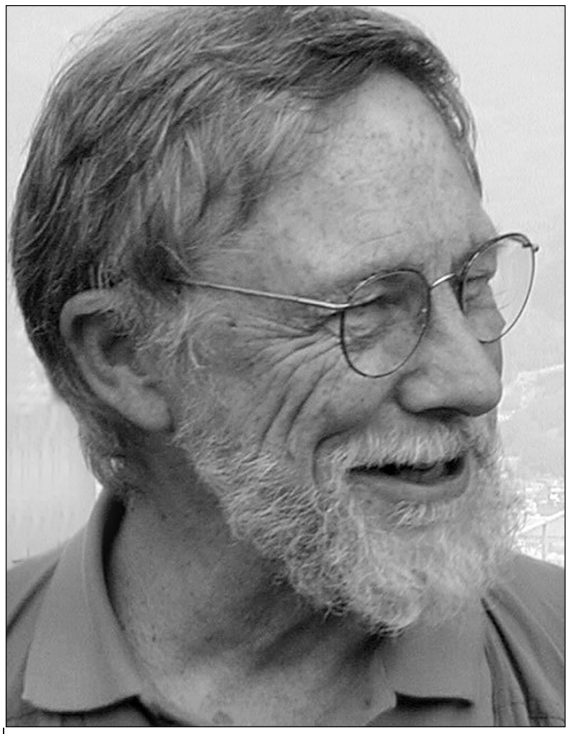

「21世紀を迎えて」巻頭記事

ゲーリー・スナイダー ツアー同行記

本出みさ

昨年10月、詩人のゲーリー・スナイダーが来日、東京でのポエトリーリーディングの後、長野は大鹿村を目指して、日本のオルタナティブ・コミュニティとの交流のツアーに出かけた。ゲーリーは1960年代のビート世代の代表的存在であり、‘56年から’68年にかけて禅の修行のため日本にも滞在している。その間にサカキナナオ、山尾三省、ナーガこと長沢哲夫らの「部族」の仲間たちと知り合った。現在、カリフォルニア州シエラネバダ山麓にてエコロジカルな生活を実践しつつ、大学教授、文筆活動、ポエトリーリーディング、環境保護など多彩な活動を展開している。

＜プロローグ＞

ボブ内田とのご縁で、通訳として同行することになったゲーリー・スナイダー「ちょっと谷間を行く」ツアー。１０月７日お茶の水湯島聖堂での歴史的なポエトリーリーディングに始まり、５日間の旅が始まった。当初は少人数で計画された旅は、いつの間にか桃太郎の旅さながら、沢山の仲間たちに囲まれて、東京、小淵沢、大鹿へと、様々な出会いを重ねながら流れていった。

７日午後、お茶の水湯島聖堂。夜行列車、ヒッチなどでなんとかたどり着いた仲間たちの顔がある。東京の中心だというのに深い緑が茂るこの静かな空間に、これから何が始まるのか、期待と高揚感が渦をまいていた。このリーディングは１０００人規模の大きなものとなり、ゲーリー、三省、ナーガ、ナナオの言葉が、月の浮かぶ夜空に静かに深く響きわたる幻想的な時を私たちは体験し、共有した。

＜谷間を行く＞

９日。小雨の中、中央道談合坂のインターでアキ、ボブ、ゲーリー、ナナオ、ナーガ一行と合流し、長坂自然農塾へ向かう。開放感ある里に広がる無農薬不起耕の自然農園。雨上がりの畑は少しひんやり、しっとりとして、みぶ菜、サトイモ、大根など、日本生活の長かったゲーリーにとって懐かしい野菜たちに、水滴がきらきらと光る。同じ不耕紀の畑でも所によって状態はさまざまだ。ゲーリーは三井さんに今年の畑の様子を熱心に聞き、作物や虫たちの名前など、ベストの胸ポケットにしのばせた自慢のカセットレコーダに吹き込む。書き留めるより早く、思い出すのに役立つそうだ。用水路のせせらぎや鳥たちの声が心地よく響く中、ツアー一行は畑を思い思いに歩きまわる。畑に立てられたティピーで、お茶と栗いも茶巾がふるまわれ、話に花が咲く。

＜小淵沢へ＞

蔵屋グリーンズで開かれた和やかな集い。お店の裏の林にあがるとそこは小さな広場。小淵沢界隈から集ってきた沢山の人たちの和やかな面々と、皆が心をこめて作った様々なごちそうがにならんでいる。たき火にかけられた大きな鍋から、おいしそうなスープの香りと湯気が流れてくる。しばしまつりで出会った人たちとの再会を楽しむ。まつりでは忙しそうに働いて話をする余裕もなかったケンさんも、体調にも関わらず、にこやかな笑顔で現れた。子供たちがブランコで遊び、子犬が足にじゃれついてくる。

小鳥のさえずり、カラスの声がこだまする林で、私たちはゲーリーを囲んで輪になり、丸太や板でできたベンチに座る。おおえさんの紹介、ナナオの詩に続いて、ボブとゲーリーによる「春のコヨーテ谷」のセッションが始まった。これはボブがギターを弾き、詩を歌い、ゲーリーがそれに続いて英語で歌うという形のもの。

春のコヨーテ谷

しっとりぬれた　葉かげ
はしゃぎ回る　幼い獣たち
鹿　熊　リス
春の星ぼし
磨きあげる　風さわやか

丘迫る斜面
崩れ落ちる　岩
泥　深ぶかと固まって
生　成　流　転
虚空を　わたり
眼を　耳をかすめ去る
鳥と草

春のオリマあたり
コヨーテの谷
おごそかに白い　朝鮮朝顔の花

タマール湾　はるか
今も漂い続ける
消え去った人びと

その小さなイグサの船よ

皆の声やドラムがコーラスに加わり、ボブのギターに合わせゲーリーが英語で歌う。そしてボブバージョンの「子供たちのために」が続く。

子供たちのために

ぼくらの前にそそりたつ
統計という名の　せり上がる丘
伸び上がる斜面
何もかも　ひたすら上る険しい道

次頁につづく

前頁より続く

写真はすべて塩原日出夫 撮影・提供／下は小淵沢で

僕ら全て落ち行くかのよう

噂じゃ次の世紀あるいはその次
　の世紀
谷や牧場あり、もしうまくゆけば
そこで僕ら平和に集っていると
もしうまくゆけば
迫りくる峰峰　上るため
きみに　君たちに
そして君たちの　子供らによせる
　ひとこと
子供らによせる　ひとこと
離ればなれにならない
花ばなを学び　花々の道を
よそおい軽く　あるいてゆけよ♪

stay together
learn the flowers
go light

みんなの高らかな声が一つになり、空にむかっていく。

歌に続いて、ゲーリーがカウンターカルチャーについて語る。

「北米だけでなく、日本や欧州の先進国の間で、メインストリーム・カルチャー（主流文化）とカウンター・カルチャー（対抗文化）という二つの流れがあります。はじめ、カウンター・カルチャーは、無責任な若者たちの一時的な現象だと捉えられた時もありました。それは35年から40年ほど前のことです。しかし日本やアメリカやヨーロッパのカウンター・カルチャーを見てみますと、私たちの社会の中で、確固たる位置を占めるようになってきているように思います。カウンター・カルチャーは、自己破壊的なメインストリームの社会の無知に対する、天秤の反対側にある、不可欠なオルタナティブなビジョンだと思います。ですから私たちはメインストリーム・カルチャーに対して、つねに批判的でなければいけないのです。そのメインストリーム・カルチャーは、発展途上国においても、歴史的に特異な、物質主義と国際的な無責任さをもたらしています。

農業であれ、環境であれ、国際関係であれ、政治問題であれ、私たちはメインストリーム・カルチャーの進む方向から離れて考えなければなりません。もちろんメインストリーム・カルチャーには素晴らしい面もあります。良い大学もありますし、病院もいいでしょう。コンピューターもあります。しかしそれが大事な部分ではありません。21世紀の新しいオルタナティブなヴィジョンが私たちには必要なのです。それが私たちがしようとしていることなのです。

今日ここに来て、この丘を登ってきて，木々を見て、みなさんが集っているのを見て、これは仲間ですね。これは何と言う名の山の部族なのでしょうね。現代の縄文部族がここにいるのですね。（笑）そんな感じですね。この辺りの谷や林からみなさん出て来られたと思いますが、本当に素晴らしいことです。

今カリフォルニアで私たちが取り組んでいる思想について話してみたいと思います。それはすでに日本でも語られ、実行されていることだと思いますが、それは”流域の思想”（ひとつの流域を中心として成立する人間と自然の共同体単位で物事を考えること）というものです。流域の思想は、私たちがどこにいて、私たちがどのような問題を抱えているのかに焦点を当てるときに、非常に有効な考え方です。

そして自分がどの地域社会に属しているのかを知るための有意義な考え方です。それぞれの小さな流域を、隣近所（ネイバーフッド）と呼びたいと思います。そしてその地域社会のメンバーは全ての存在だと考えたいと思います。地域社会のみんなというのは、人間だけでなく、木々や鳥やトカゲや蛙など全ての存在を含めたものです。それが私の言うニュー・エコロジーです。

そこには新しいスケールの政治も現れてきます。この考え方は、私たちが自分の地域のエコロジーについて、誰かを待つのではなく、自分で動き出すというふうに働きます。もちろん大きな問題にも取り組まなければなりません。たとえば長良川とか、もっと大勢の力が必要な問題にも取り組まなければなりません。そしてアマゾンとか東南アジアの熱帯雨林破壊について取り組まなければいけません。しかし私の経験から、私たちの流域の問題に取り組むことができれば、そうした問題にも効果的に取り組めると考えています。そしてこうしたことをするのは、とても楽しいことです。もしそれが楽しくなければ、しなくていいでしょう。それがニュー・エコロジーのもう一つの側面です。

今から詩を読みます。食べ物に関する詩です。世の中のすべての存在は食べ合っている、という意味の詩です。生態系も、いろんな食べ物を持ち寄るポトラック・パーティーのようなものです。太古の昔から、私たちは大きなポトラック・パーティーの中に生きています。そして食事に来て、私たちもまた何ものかに食べられる食事であるということです。

草の中にある生きた胚珠を食べる
大きな鳥のたまごを食べる
揺れる木々の正中のぐるりに詰め込まれた果肉質の甘味
やさしい声で鳴く雌牛の脇腹や太い腿の筋肉
羊の跳躍の中に潜む活力
雄牛の尾が空を切る音
地中で超え太った植物の根を食べる
みなが生きているもののいのちに頼っている
葡萄の種の中に隠された宇宙から紡ぎ出される光のかたまり
お互いの種を食べ合い
ああ、食べ合う
お互いどうしをたんと食べている
恋人の唇にキスをする
唇に唇を

＜大鹿へ＞

翌日は大鹿目指して出発。こおろぎの声が響く夕暮どき、深い谷の斜面に立つイエルカ＆悦子夫妻宅に到着。彼らはこの大きな農家でギリシャから輸入された山羊毛で、天然の色を生かした絨毯を織っている。アトリエを見学したゲーリーは、日本の山奥の農家で、ギリシャの山羊毛が織られていることをとても面白がった。天井の高いキッチンでは、女性たちによって夕食会の支度がすすんでいる。

いろりを囲んだ夕食では旬の野菜の煮物、すし、焼き魚などのごちそうや、ゲーリーの好きな日本酒が巡り、アキの「デイゴの花」、イエルカのロシア民謡などいろんな歌が披露された。ボブとゲーリーのセッションはボブの音楽センスと、ゲーリーの深く落ち着いた声と歌の融合で何度聞いても心地よい。いつしか、いつも静かで控

●山尾三省の本『カミを詠んだ一茶の俳句』（地湧社）『アニミズムという希望』（野草社）他多数
●ナーガ（長沢哲夫）の本・詩集『手のひらに虹の長い尾羽がまわっている』（プラサード書店＝0555-24-8943）
●ナナオサカキの本『ナナオサカキ詩集・地球B』『詩集・ココペリ』（いずれもスタジオリーフ発行＝0558-62-4533）
＊本の問い合わせ：ナワプラサード＝03-3332-1187

えめなナーガが、いろりの前で「ともだち」という詩に沖縄民謡の節をつけて歌いはじめる。

曲がりくねった　山たちが　星の外から
　やってくる
曲がりくねった　砂たちが　星の姿で
　やってくる‥‥

遙か諏訪之瀬島の海や浜の風景が生き生きと浮かび上がる。そしてボブがギターで流れるようにナーガの「太陽のナデシコ」を歌う。

太陽のナデシコを　僕は眠らないで探し
　ていた
地平線までつづくこの夜‥‥

そのイメージはボブの曲に乗って鮮やかに、まるで絵本のようにいろりの上に広がった。言葉がいのちとストーリーを持つその神秘性を、これほどはっきりと感じたことはない。味わいある酒器に酌み交わされる酒、おしゃべり、こどもたち。静かな長野の夜が過ぎていった。

＜山を歌う＞

最終日。ボブの案内で、南アルプスをほぼ３６０度見渡せる展望台へと向かう。明るく晴れ渡る秋の空の下、くっきりと浮かび上がった峰みねを眺めながら、ゲーリーはボブに、「山を歌ったことありますか？」ときく。不思議そうなボブを前に、ゲーリーは山々の線を指でなぞるようにして、高低に合わせて声を出す。「今度はシエラネバダへ来てください。とても良い歌になりますよ」と。

お別れの昼食会は大鹿は南山の田村アキ ＆すまこ宅の畑で行われた。大きなティピーが立ち、１０月とは思えない暖かい太陽の下で、野菜や山菜の天ぷら、おにぎり、などが振るまわれる。ゲーリーはティピーの中に入ってきた小さな雨ガエルが気に入ったようだ。

出発も近くなったころ、ゲーリーが語った最後のメッセージ。

「私たちはそれぞれ生物であり、動物です。私たちは植物や動物を食べて生きています。空気を吸い、水を飲む。私たちはこの自然全ての進化の中から創造されました。ここは私たちの世界であり、それは疑う余地がありません。私たちの体は誰もが野生生物です。それを実践する必要はないし、人間が自由である必要もない。でも私は、もし望むならその術をおみせしましょう、そう言っているだけです。自然を愛しなさいとか、自然を大切にせよといっているわけではないのです。私の本は、地図のようなものです。その地図を見ることを誰にも強要することはできません。でも、もしその地図を使いたいという思いがあるのなら、これは参考になる地図だと思います。

私は人間の幸福の実現ということはあまり考えたことはありません。自然は残酷ですし、みんないつかは死にます。大切なことは幸福であるとか、自由であるということではなく、本当の人間らしく生きることだ、そう思っています。」

＜エピローグ＞

この旅に関わった一人一人が、多くを感じ、気づき、考えたに違いない。通訳として同行させてもらった私は、ゲーリーのそばで、ただひたすら言葉を消化し、日本語に換えて伝えていくことで精一杯だった。今こうして振り返りながら、あの旅を客観的にとらえ、特に印象的だった事柄の断片がよみがえってくるという感じだ。

ゲーリーはこう語った。

「私の暮らすコミュニティでは、皆が様々な活動をしています。人によっては活動に疲れ休息がいる場合もあります。そんな時は数年ほど身をひいて休んだり、他のことをする。そのことに誰もとやかく言わない、そんな自由な受容の雰囲気があります。」

上の写真は大鹿村で

いわゆる主流から距離を置き、オルタナティブな生き方を模索していく中で、私たちは様々な社会や環境問題に意識を持ち、活動してゆく。時としてその問題に振り回され、余裕を失い、知らず知らずのうちにプレッシャーを抱え込むこともあるだろう。そんなとき、ふと立ち止まって休むことができるような、ゆとりのあるコミュニティの存在は貴重だと思う。コミュニティを構成するのはあくまでも個であり、各々が自由であるという認識を皆が共有しているなかで、安心して、一人一人が、それぞれの地に足のついた生活を営んでいけるのだろう。

ゲーリー、ナナオ、三省、ナーガ、ボブ。言葉という表現方法を徹底的に掘り下げ、一つ一つを慎重に選びコミュニケーションする言葉のアーティストたち。それぞれが、それぞれの独特の感性と言葉を使って、自らの思想や世界観をコミュニケートしていた。ナナオのように、英語に堪能だけでなく、詩的な表現を英語で見事にずばりとやってのける天才が同席している時は、今まで以上に、自分の使う言葉を一つ一つ確認しながら、無駄なものをそぎ落としながら慎重に選ばざるおえない、そういう緊張感を味わった。ボブとゲーリーやナーガのセッションでは、活字としての詩が、紙の上から起きあがり、生き生きとした豊かなイメージを描いていく様子をこころの眼と耳で感じさせてもらった。貴重な時であり、経験であり、ここに私を呼んでくれたボブに心から感謝している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この旅は、ゲーリーにとっては、長らく離れていた日本のオルタナティブ・コミュニティーを再発見する旅であり、迎える私たちは、ゲーリーの人間性と言葉にふれ、それぞれが歩む、その人だけの特別な道を、再確認し、分かち合う、そんな体験だった
ように思う。

この旅を通して、多くの人が再会し、出会い、新たな輪がつながり、広がり、今も広がり続けていく、そんな余韻が皆の心の中にあるのではないかと感じている。この旅を可能にし、サポートしてくださった皆さま、各地で心のこもった食事を用意してくれた皆さま、本当に有り難うございました。

（＊協力： おおえまさのり、中野信悟）

BOOKS

「野生の実践」山と渓谷社　1900円
「聖なる地球のつどいかな」
　山と渓谷社　2000円
「惑星の未来を想像する者たちへ」
　山と渓谷社　2000円